

市場営業統括部 チーフ・エコノミスト 山下えつ子

## 来週のポイント

### ドル/円： レンジ内

|      | 週末 正午  | 次週発行まで       | 3ヵ月後          |
|------|--------|--------------|---------------|
| ドル/円 | 91.32円 | 89.50-92.50円 | 85.00-100.00円 |

- ・ 各国中銀の金融政策決定会合があり、警戒感から動きづらい。
- ・ 米 FOMC は警戒されたほどタカ派にはならない。

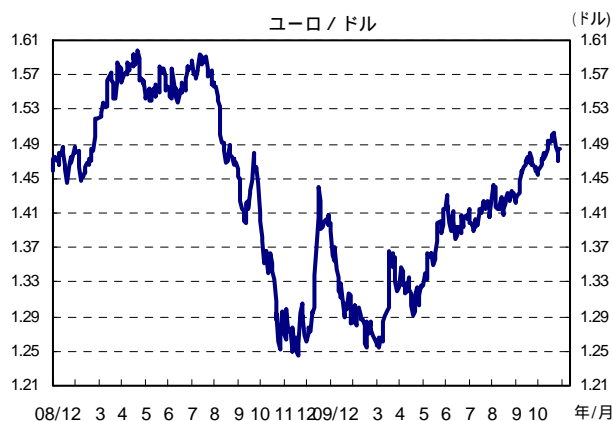
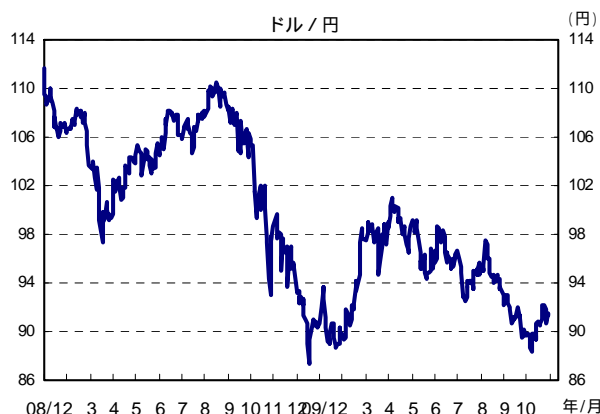
### ユーロ/円： 週後半に上昇

|        | 週末 正午    | 次週発行まで          | 3ヵ月後            |
|--------|----------|-----------------|-----------------|
| ユーロ/円  | 135.54円  | 134.50-138.00円  | 125.00-135.00円  |
| ユーロ/ドル | 1.4843ドル | 1.4750-1.5000ドル | 1.3500-1.4500ドル |

- ・ ECB 理事会は総裁会見でユーロ買い。
- ・ 英 BOE の金融政策委員会にも注目。

本レポートは、本日正午までの情報を元に作成しています。

FOREX WEEKLY は弊行ホームページでもご覧頂けます。  
(<http://www.smbc.co.jp/> マーケット情報 外国為替  
情報 フォレックス・ウィークリー)



(データ出所：Reuters)

本レポートは情報の提供を目的としており、何らかの行動を喚起するものではありません。ここに示した意見は本レポート作成日現在の筆者の意見を示すのみです。データや数値の抽出範囲・基準は任意で設定している場合があります。データ・資料等については、数値等の誤りが含まれている可能性があります。本レポートに基づき、お客さまが投資のご判断をされた結果に基づき生じた損害・損失について当行は一切責任を負いません。投資や資金運用に関する最終決定は、お客さまご自身で判断されるようお願い申し上げます。

## 足元のマーケット動向、及び来週の見通し

|     |        | 今週のレンジ          | 来週の予想レンジ        |
|-----|--------|-----------------|-----------------|
| ドル  | ドル/円   | 90.23-92.33 円   | 89.50-92.50 円   |
| ユーロ | ユーロ/ドル | 1.4683-1.5064ドル | 1.4750-1.5000ドル |
|     | ユーロ/円  | 132.81-138.49円  | 134.50-138.00円  |

(今週のレンジは先週金曜日正午～本日正午、予想レンジは本日正午～来週金曜日正午)

株や原油・コモディティなど所謂リスク資産の相場に調整が入り、これに伴い為替市場ではクロス円が下落、ドル円も連れて下落した。このまま大きな調整になるかと思われたが、29日の米GDPが強めとなったことで反転。週を通すと、ドル円は92円台前半から90.23円まで一旦下落した後、91円台後半へ、ユーロドルは1.50台から1.46台後半まで大きく下落した後、1.48台後半へ、と大きな動きとなった。

調整のきっかけは先週末の米英の新聞記事だった。11/3・4に開催される米FOMCで声明文文言変更が行われ、出口に近づく、との市場の警戒感が強まり、低金利継続を前提としたリスク資産買いに手仕舞いが出た。決算を控えたファンド勢の利益確定売りという資金フローもこれを増幅したと指摘されている。

世界的には、10/6にオーストラリア中銀が利上げ、今週も10/28にノルウェー中銀が利上げ、と超低金利を解除し始める中銀が出始め、市場は出口に神経質になっている。来週にかけて、本日の日銀(本日13:00過ぎの情報ながら、CP・社債買入れの年内終了、企業金融支援特別オペの来年3月まで延長を決定)、11/3豪中銀(追加利上げが予想される)、11/3・4米Fed、11/4・5英BOE、11/5欧ECB、と複数国の中銀の金融政策決定会合が予定されている。来週は加えて、米国のISM、雇用統計といった経済指標発表も控えており、市場はイベントがすべて終了するまで動きづらい。

米国のFOMCでは利上げ観測が強まるような文言変更はないと予想するが、10月末で国債買入れは予定通り終了する見込み。米景気も底固く、利上げ開始の時期自体は遠くても、出口の方を向いて進んでいると市場は認識している。このため、超低金利を背景とするリスク資産への投資は出口議論が表面に出てくると巻き戻されやすい。為替市場では「リスク資産買い・ドル売り、クロス円買い」から「リスク資産調整・ドル買い戻し、クロス円売り」へ。ただ、中銀から見れば、パブルが警戒される株やコモディティ相場に“適度な”調整が入り、かつ、ドル安急進行も回避できることは好ましいことかもしれない。

円については、先週の悪い金利の上昇を材料とする円安は続かないが、米国以上に遠い日銀の利上げが意識され、あるいは来週の米経済指標が上振れれば、リスク資産買いに戻る局面では円安だろう。クロス円、ドル円、ともに上昇。リスクはFOMCの声明文が予想以上にタカ的なものとなることだが、この場合はリスク資産および債券相場が大幅に下落、クロス円急落となり、簡単には終わらないだろう。

ECB理事会では大きな決定はないだろうが、総裁記者会見では、質問があれば、緊急措置としての1年物オペを3回目の12月で終了する可能性が示唆されると予想(ユーロ買い材料)。一方、英BOEはQ3GDPマイナスを受けて、資産購入プログラムの総枠の拡大を決定すると予想する。先進国の中で英国は反対方向を向いている。来週は3日の豪中銀の追加利上げで警戒継続だが、4日の米国がタカ派にならず、5日の英国が出口に逆行した場合、英ポンドは特にユーロに対して急落(ECB理事会でもユーロ高)、ユーロ円が押し上げられる。リスク資産買い、ドルは対ユーロで下落するが、対円では上昇、と見込む。